

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26580001

研究課題名(和文) 倫理と宗教の相克と協働 ヘブライズム・ヘレニズムの交錯をめぐる比較研究

研究課題名(英文) Conflict and Collaboration Between Ethics and Religion: Comparative Studies  
Centered on the Mixture of Hebraism and Hellenism

研究代表者

関根 清三 (SEKINE, Seizou)

東京大学・人文社会系研究科・教授

研究者番号：90179341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の学術的な特色は、倫理の宗教的基盤を探ることを通して、しばしば対立的に考えられてきた倫理と宗教の協働の可能性を解明するにあった。研究代表者は、これをユダヤ・キリスト教の文脈で旧約・新約聖書と関連付けて行うとともに、後期西田哲学によってこの協働の哲学的基礎づけを行った。こうした研究の学術的な意義は、倫理的な混迷と、宗教的な抗争に奔る現代に、新しい哲学の灯をともし礎となり挑戦となることにある。代表者は自らの研究成果を国際的に発信し続けている。

研究成果の概要(英文)：The academic distinctiveness of this research project has been to demonstrate the potential for collaboration between ethics and religion, which are often thought to be pitted in conflict, through examining the religious foundations of ethics. The principal investigator sought to relate this to the Old and New Testaments within the Jewish and Christian contexts, and to strengthen the philosophical foundation of this collaboration through Nishida's later philosophy. The academic significance of this research has been to lay a foundation upon which to shine new philosophical light in this present age that is marked by ethical confusion and the rush to religious conflicts. The principal investigator continues to present his research results internationally.

研究分野：倫理学

キーワード：倫理 宗教 ヘブライズム ヘレニズム

### 1. 研究開始当初の背景

旧約の十戒の「殺すなかれ」という戒めは、諸宗教の認める普遍的な倫理の筈であるにもかかわらず、現代の宗教は、信仰に基づくテロリズムや戦争による殺人を是としがちである。宗教は倫理を超えると自称し、倫理は宗教的権威付けを嫌って独立しようとする。ただし倫理と宗教が互いに自律性を主張し対立することは、古代のアブラハムによる愛息イサクの献供物語に見られるように、必ずしも現代に限ることではない。代表者関根は2012年上梓した大部の編著『アブラハムのイサク献供物語』(日本基督教団出版局、2012年)において、この物語の諸解釈を古代ヘブライズム、ヘレニズムから、ヨーロッパ中世哲学、近代哲学を経て、現代哲学にまで広範囲に渉猟し、紹介・翻訳し、関根自身の論考を加えた。そしてこの物語に現われている倫理と宗教の相克を分析し、爾後の解釈史を洗って両者の協働の可能性を指摘した。本研究の直近の背景には、この書物があった。以上のような研究を進めてきた代表者は、これまでの研究成果を、ヘブライズム、ヘレニズムそれぞれの気鋭の研究者との共同研究に開いて、より多角的、また複眼的観点から再検討し、倫理と宗教の協働の可能性を、より深くかつ多面的に解明したいと考えるに至った。古代ギリシア哲学、とくにプラトン、アリストテレスを専門とする高橋と、代表者と専門を同じくしつつ、ハーヴァード大学で博士論文を完成し欧米の研究状況に詳しいショートという、二人の若手分担者に声をかけ、本共同研究を立ち上げたのは、以上のような背景があった。

### 2. 研究の目的

本研究は、倫理と宗教が対立・相克しがちな現代の思想的状況を見据えつつも、思想史の源流に立ち帰って、両概念の再検討を試みる。すなわち、(1) 諸宗教、特に古代ユダヤ教が、哲学的吟味に耐えうる倫理的基盤を有することを解明し、また(2) 古代ギリシア思想における哲学と宗教の同質性と差異性を精査し、さらには(3) 爾後の西洋思想における、ヘブライズム・ヘレニズム両思想の交錯の諸相を吟味することによって、倫理および宗教の再定義を試み、倫理と宗教が乖離する現代の思潮に対して、哲学的な挑戦と新たな提言を試みることを最終目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究の方法は、一般的に言って、以下の個人研究と共同研究の組み合わせに特色がある。

(1) 研究代表者、および研究分担者の各人が、それぞれの担当分野におけるテキストの読解と二次文献の精査を基にしつつ、国内外の研究者との討論や資料収集などを通じて各自の見解を彫琢する。

(2) 年1回の研究発表会では、研究代表者

と分担者各人の研究を、相互の批判的な対論の中で検討する。本研究は、この二つのフィードバックの中で遂行される。

### 4. 研究成果

(1) 研究代表者・関根による研究成果は以下の通りである。

国際哲学会でのシンポジウム発題として発表された成果において、まずは宗教の側から哲学の必要性が語られる。すなわち、経典を読むうえでそれを聖典として絶対視しようとする信仰の立場からのアプローチと、それをテキストとして批判的に検討する学問アプローチがあるが、いずれも限界をもっている。前者は党派的一面なものであり、後者は価値の観点を欠いている。それらの欠を補うものとして哲学的な解釈が重要なのである。その例として旧約聖書の二箇所、すなわち「コーヘレス書」の「空の空、全ては空」という言葉と、「第二イザヤ書」に見られる「代理贖罪」という思想を挙げることができる。前者については、ニーチェの1880年代の断片を参照することによって、著者コヘレスが真の意味においてニヒリストであったことが分かるし、後者についてはM・ウェーバー(『古代ユダヤ教』)に照らして、第二イザヤの思想を明晰に理解することができる。次に、いわば逆の面から、哲学が個々の宗教の違いを超える共通項を捉えようということ語るために、西田の神論(「場所的論理と宗教的世界観」)を取り上げた。西田はまず、人格神の概念を相対的絶対という矛盾を犯すものとして批判する。しかし、他のものとの関係を欠けば、神は無力である。そこで神の人間との関係は、外なる相対者との関係ではなく、内なるもろもろの相対者との関係でなければならない。すなわち神は絶対的矛盾の自己同一であり、人間を含む万象は神の中にあり、一切のものは神の自己否定によって存在を得ている。この万有内在神論(panentheism)にはヘーゲルの影響が見られるものの、諸宗教の経験に共通の基盤を与える思想であると評価することができる。そのことを示すために、提題では、創造神話、父による子の殺害、悪人の救済(親鸞)といったテキストをこの思想によって説明する。結論としては、宗教と哲学=倫理学の関係を次のように総括する。宗教は主客を超える真の神に関わる実践であり、倫理学は秩序に基づく共存の理路の探究であるが、両者はともに働いて、人間存在を全体化し、形成する、と。

研究代表者は、「命」をめぐるキリスト教思想の展開をあとづけ、さらにその展開をできる限り普遍的な形で表し、宗教と倫理との協働を探る試みを続け、その成果を公表している。より具体的には、次のようになる。

まずは、キリスト教の基本的なストーリーである。人の命は創造神によって創造されたけれども、神から離反した罪によって死に瀕

した。では、その死に瀕した命がどう回復されるか。神の無差別のアガペーへの覚醒によって、回復されるというのが一つの答え方である。それから、原始キリスト教の十字架の代理贖罪の信仰によって、命が回復されるというのが、もう一つの答え方であった。この二つの答え方が、基本的にキリスト教のこの根本問題に対する答えの方向である。さらに、霊肉の命は終末における復活において、完全に回復されるという答え方も、その哲学的当否は別として、キリスト教は呈示している。以上が、命という鍵語に注目して整理した、キリスト教という宗教の教義の大筋である。

それではこのような命についての考え方の何らかの普遍的な形を模索するとどうなるか。つまり、如上の特殊キリスト教的な物言いを、哲学的合理的な考え方を試金石として、これと抵触しない形に再構成をこころみるならば、どうなるか。まず、創造神話は非神話化され、命が、誰によってか詳らかとしなないけれども、不思議な稀有さ・在り難さを秘めつつ、与えられているという風に再構成された。しかもこの命の所与性の認識は、所奪性の認識によって補完されなければならないということも、三・一以降、我々は等閑に付すことができないという点が確認できる。またアガペーと贖罪に関しては、イエスのように、神の無差別のアガペーへの覚醒を強調するか、あるいは原始キリスト教団のように、それに覚醒できない人の罪の贖いを強調するかで、論点は拮抗するが、共に命の回復の方途を指し示すものとして読み解かれることを示した。十字架の贖罪によって罪人の責任が誤魔化されるという哲学者の批判については、むしろ罪を誤魔化しがちな弱い人間の性癖に対し、罪の赦しという搦め手から迫って罪の所在を鋭く明化し、その罰を潔く負うように人を促す絡繰りとして贖罪信仰を機能させることにより、乗り越えられるし乗り越えなければならないことを、示唆した。しかし、命の復活まで論ずる終末論は、歴史の起源も目標も本当には知らない中間時を生きている人間の、分を超えた越権行為として慎むべきではないかということが、その先に指摘できる。ティリッヒ流に言い換えれば、無制約者そのものと、それを指示する制約的な象徴とは、明確に区別されなければならない。この世のものに過ぎない宗教は、これまたこの世の相対的なものの一つに過ぎない。それは絶対的なものを指し示すわけですけれども、しかしあくまで相対性の軛を帯びており、その二面性を超えることはできない。

こうした宗教の具体的な象徴の意味を解読して、それが指し示す本質を抽象的に取り出すのが哲学の仕事である。そこでは個々の宗教に通底する本質が、論理によって明らかにされ、無制約的絶対的な超越と、制約的相対的な象徴との区別が自覚にもたらされる。西田幾多郎や八木誠一らがした仕事というの

は、そういう仕事である。

宗教と宗教の抗争と憎悪の連鎖を断ち切るものは、そうした哲学の思索であり、しかしその哲学に具体的な衝動力を与えるものが宗教である。両者は、そういう関係にある。つまり、哲学と宗教は、その相補的緊張関係に耐えて、互いの欠落を相補うのでなければならない。

以上が、関根により達成され公表された研究成果である。

(2) 研究分担者のショートは、旧約聖書における重要な痛悔の祈りに関する様々な解釈についての研究してきた。古代から現代まで、また東洋から西洋に至るまで、多くの解釈者たちが、筋が通るものにしようと努めてきた詩編の言葉がある。その言葉とは、実際には、詩編そのものが示すように、痛悔者が彼の民に対してひどい罪を犯していたのにもかかわらず、「あなたに対して、あなたのみに対して、私は罪を犯しました(詩編 51 章 4 節)」という痛悔者の言葉である。ショートは教父たちの重要な解釈の戦略と、ユダヤ教とキリスト教の解釈の戦略とを比較・対照する。この研究を通して、時代を経て鳴り響いてきた宗教と倫理の相克の一事例に対する批判的評価と新しい洞察を 2016 年に開催される国際学会にて提示する予定である(発表することはすでに決まっている)。

(3) 同じく研究分担者の高橋の研究成果は以下の通りである。

まず、後期プラトンにおける彼の神観念について、とりわけ、神と知性と魂の関係について問いつつ、研究を続けてきた。魂なしに知性はないという解釈がある一方で、知性がそれ自体として魂なしにありえ、それこそ神であるという解釈もある。『法律』を検討することで、後者の方がよりプラトンの真意に近いという結論に達した。その後、プラトンの神観念が、人間における魂と知性の在り方にも反映していることについての考察へとすでに向かっている。

また、アウグスティヌス『告白』における「泣くことの甘美さ」についての解釈を通じて、超越者を見失った人間における快の歪みを明らかにした。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

関根清三、旧約聖書の一断面 「命」という視座から(続)、倫理学紀要、査読無、23 巻、2016、1-29

ランドル・ショート、合唱音楽への崇高の召し、礼拝・音楽研究、査読無、65 巻、

2016、29-44

ランドル・ショート、ヘンデル『メシア』第 部メシアの受難から王の王としての即位まで 音楽に表されている福音、礼拝・音楽研究、査読無、65 巻、2016、87-104

関根清三、旧約聖書の一断面 「命」という視座から、倫理学紀要、査読無、22 巻、2015、1-23

〔学会発表〕(計 4 件)

関根清三、西田哲学と旧約聖書、東西宗教交流学会、2015 年 8 月 6 日、京都パレスサイドホテル(京都市)

Randall SHORT、Early Christian Interpretation of Psalm 51: 4[6], The Society of Biblical Literature 2016 International Meeting, 2016 年 7 月 3 日~7 日

Randall SHORT、Theology and Ethics of Repentance in Modern Interpretations of Psalm 51:4[6], The Society of Biblical Literature 2016 International Meeting, 2016 年 7 月 3 日~7 日

Masahito TAKAHASHI、Why is weeping so sweet?: Book 4 of Augustine's *Confessions*, Asia-Pacific Christian Studies Society 9th Annual Conference, 2014 年 9 月 5 日、東洋英和女学院大学(神奈川県・横浜市)

〔図書〕(計 3 件)

Seizo SEKINE、Konstantine Boudouris, Costas Dimitracopoulos, Evangelos Protopapadakis, et al., Selected Papers from the XXIII World Congress of Philosophy: Philosophy as Inquiry and Way of Life, Philosophy Documentation Center, 2015, 437 (203-212).

土橋茂樹、納富信留、栗原裕次、金澤修、高橋雅人、他、内在と超越の闘 加藤信朗米寿記念哲学論文集、知泉書館、2015、289 (119-132).

Seizo SEKINE、Hebrew Bible / Old Testament. The History of Its Interpretation: Volume III/2: The Twentieth Century, Vandenhoeck & Ruprecht, 2015, 777 (285-299).

〔その他〕

なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

関根 清三 (SEKINE, Seizou)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号: 90179341

### (2) 研究分担者

ショート ジョン・ランドル (SHORT, J. Randall)  
東京基督教大学・神学部・教授  
研究者番号: 00448937

高橋 雅人 (TAKAHASHI, Masahito)  
神戸女学院大学・文学部・教授  
研究者番号: 90309427

### (3) 連携研究者

なし